

「風景開眼」 (東山魁夷)

皆さんは、日本画家、風景画家として有名な東山魁夷という人を知っていますか。東宮御所や皇居宮殿の障壁画や奈良・唐招提寺の御影堂障壁画「黄山曉雲」などの作者として知られている人で、国民的な日本画家と言われています。



東山魁夷は一九〇八年、横浜市で生まれました。父親の仕事の関係で三歳の時に神戸西出町に転居。兵庫県立第二神戸中学校（現在の兵庫高等学校）在学中から画家を志し、父親の反対を押し切って、東京美術学校（現在の東京芸術大学）日本画科に進学しました。結城素明に師事し、在学中の一九二五年には第一〇回帝展に「山国の春」を出品し、入選を果たします。その後、父親が事業に失敗し、経済的に困窮しますが、ドイツのベルリン大学（現在のフンボルト大学）に自費で進学し、その後、交換留学生に年間の推薦を受けての留学生活を送ることができたのでした。

帰国後の一九四〇年、日本画家川崎小虎の娘、すみと結婚し、家族のためにも早く良い作品を描いて認められたいと焦る魁夷でしたが、同級生が皆華々しく脚光を浴びる中であっても、一向に芽は出ませんでした。兄を結核で失い、また戦争中に父を失った魁夷は、終戦間際の一九四五年に徴兵され、熊本県で、爆弾を抱えて戦車に体当たりする訓練に毎日明け暮れていました。ある夕暮れ、魁夷は、熊本城から眺めた阿蘇連山の姿に魂を震撼させられるほどの感動を覚えたのでした。著書『我が遍歴の山河には「風景開眼」として有名な一説があります。

「・・・私は酔ったような気持ちで走っていた。魂を震撼させられた者の陶醉とでも言うべきものであろうか。つい、さっき、私は見たのだ。輝く生命の姿を・・・。熊本城からの眺めは、肥後平野の彼方に、阿蘇の裾野が霞む闊達な眺望である。・・・なぜ、今日、私は涙が落ちそうになるほど感動したのだろう。なぜ、あんなにも空が遠く澄んで、連なる山並みが落ち着いた威厳に満ち、平野の緑は生き生きと輝き、森の樹樹が充実したたたずまいを示したのだろう。・・・これをなぜ描かなかったのだろうか。今はもう絵を描くという望みはおろか、生きる希望もなくなったというのに、・・・歓喜と悔恨がこみ上げてきた。・・・もし、万が一、ふたたび絵筆をとれるときが来たなら・・・おそらく、そんなときはもう来ないだろうが、・・・私はこの感動を、今の気持ちで描こう。汗と埃にまみれて熊本市の焼け跡を走りながらわたしのおもいはしめつけられるおもいであった」。やがて終戦となり兵隊でなくなった魁夷は、義父の小虎、母、妻が疎開していた山梨県中巨摩郡落合村にいったん落ち着きます。その後、母の死を契機として千葉県市川市に自宅を建て、創作活動が続けることになります。

一九四七年、第3回日展で阿蘇の風景話題材とした「残照」が特選に入賞し、以後、「道」「光昏」「曙」「花明かり」「白馬の森」などの数多くの作品を世に送り、日本画の巨匠として地位を確立したのでした。

「・・・私は生きているというよりも生かされているのであり、日本画家にされ、風景画家にされたいと言える。その力を何と呼ぶべきか、私には分からないが」と述懐している魁夷の境地は、私たちが自分自身の人生を切り拓き、未来社会を逞しく目的をもって生きていく上での大きな示唆を与えてくれていると言えます。

道徳授業地区公開講座「講演会」を終えて 11/13

平成20年度卒業生・シャーフセインシャー

この度は練馬区立貫井中学校が主催する道徳地区公開講座にお招きいただき誠にありがとうございました。先生方をはじめとして、携わった方々の御尽力に感謝するとともに、当日足を運んでくださった保護者の方々にも深く御礼申し上げます。

母校への講演は私にとっても非常に光栄なことで、中学時代はあのように母校を訪れるとは思っておりませんでした。それはさておき、相変わらずの貫井中学校の生徒の元気の良さと礼儀正しさはOBとして誇りに思いました。

思い返すと、中学校を卒業してから私立高校に入学し、国立大学に入学をしてアスリートとしては王道の道を歩んできましたが、その道は非常に険しいものでした。結果的に2度のオリンピックを経験させていただいたのですが、それらを乗り越えられたのは貫井中学校で学んだことが生かされたおかげだったと思っています。特に生活指導や社会人としての礼儀、それらを中学校の早い段階で学んだことでその先に待ち受ける壁を乗り越えることができました。

講演の際に生徒が一番驚いていたことで、私が中学時代ほとんど柔道の試合に勝ったことがないということ。実際にその通りで、中学時代にアスリートとして、或いは一社会人として完成させない教育がその後の本領発揮につながったと思います。教育とはそういうものだとは私は信じていて、改めていい指導者に出会ったことを幸運に思っています。

今私の人生でチャプターが訪れようとしています。アスリートを退いて一般人になるか、パリのオリンピックに備えるか。いずれの選択をしたとしても、誠実さや貫井中学校を背負っていることを忘れずに挑戦し続けていきたいと思っています。また貫井中学校に帰れるのを楽しみにしております。



「講演を聴いて」

3年生

今までの講演で1番おもしろいというか、興味深いというか、楽しいというか、何といたら良いか分かりませんが、とにかく1番思い出に残るような講演会でした。貫井中の卒業生だからなのか、親近感みたいなものがありました。1つ1つお話がていねいで聞きやすかったです。私は努力することが苦手で、サボりがちな性格でもあります。なので、シャー・フセインさんの夢にむけての姿勢をととても尊敬しました。私も受験に向けて、メンタル面でも努力をおこたらないようにしたいです。

3年生

とても興味深くおもしろい講演会でした。オリンピック選手の生活やお金の使い道、東京オリンピックの様子などについて知らなかったことをたくさん知る機会となりました。自分につながれることがあればつながりたいです。

2年生

オリンピックは、世界のトップたちが集まり、全く別の世界というイメージがどこかにあったけれど、シャーさんの講演で少し身近に感じることができました。また、テレビで見た選手村について詳しいお話が聞けて、食堂で他の選手との交流や、ダンボールベッドなど、選手のために色々な工夫がされていることにも気づきました。

シャー・フセインさんは、オリンピックに出るのもすごいけれど、オリンピックに出られるようになるまでの生き方がとてもステキだなと思いました。柔道だけではなく勉強と両立させて、努力してオリンピックに出たりしてすごいと思いました。メンタルトレーニングははじめて聞いたけれど、メンタルトレーニングにもお金がかかるけれど、お金をかけても、メンタルをケアすると、なにかに集中することが出来ると知って、自分もメンタルケアをして、勉強や運動、部活などに集中できるようにしたいです。

保護者の感想等

- ・お話しが上手、アスリートな意見、一人一人に応えて頂いていた
- ・貫井中で学んだことが社会に出て役立っている、娘もそのような学校で学べて感謝している
- ・この話が子どもの心に響けば良いなと思った メンタルの大事さを感じた
- ・メンタルトレーニングに1番お金をかけたといったことが印象的、怪我に気を付けるため食事や栄養バランスが大事と感じた
- ・中学で学んだことが社会に出てベースになっていると思う
- ・オリンピックの声を聞く機会を持てて貴重な体験だった、中学での体験がその後の基礎になっていると思う
- ・中学校での指導がその後の役に立っている



学校公開アンケートから

- ・話の内容がとても濃く、時間があっという間でした。生徒たちの質問にもとても丁寧に答えられていると思いました。メンタルトレーニングの話などは、参考になり、家でも子どもと少し話をしてみようと思います。
- ・大変貴重なお話を聞かせて頂きました。子どもたちの質問にもとても丁寧にお答え頂きました。選手村での話し（写真）もミーハー（笑）と思っちゃいました。フランスパリのオリンピック出場目指して頑張ってください。テレビの前で応援致します。

セーフティー（薬物乱用防止）教室

11/19

練馬警察署生活安全課少年係・スクールサポーター2名の方にご来校頂き、セーフティー教室（薬物乱用防止教室）が実施されました。会の冒頭に警察の方から薬物に関する詳しいお話がありました。

薬物の定義は、わずかな量で、鎮痛、神経を麻痺させる効果があり、習慣性が強く、薬物依存を起し、使用を中止すると禁断症状を起すとともに、乱用の恐れがあり、個人及び社会に害を及ぼす虞（おそれ）のあるのが「薬物」との説明がありました。

また、風邪薬、麻酔薬等にも麻薬の成分が含まれていること、さらに使い方を誤ると「薬物依存」を起し、薬から離れられなくなるなど、人格破壊、命を落とすことになりかねないとの話がありました。そして、最近若い人の大麻使用が増えている事実を教えてくださいました。

大麻は昔から利用されており、この大麻を乾燥させたものがマリファナで、昨年の少年の所持件数は警視庁管内で令和元年105人、令和2年108人と増加し、今年令和3年は上半期ですでに88人で増加しています。中学生の使用者も8人、最年少は14歳でした。

特に国立精神・神経医療研究センターは大麻使用がより強い覚醒剤等の乱用につながる可能性が高く、警鐘を鳴らし、大麻は依存性がないというのはウソで、進行性疾患に陥ると言っています。



薬物依存とは、止めようと思っても止められない、日ごとに薬物に頼る機会が増え、中止すると禁断症状が出てしまう。薬物乱用防止教室の後半に見たDVDでも、その怖さの一端、禁断症状が映し出されていました。同時に脳に与える影響は酷く、薬物の乱用により脳は萎縮し、壊れてしまった脳に新しい脳細胞は生まれて来なく、二度と甦らないとのことでした。

ずいぶん前の日本広告機構のCMにあった「覚醒剤止めますか、それとも人間止めますか」のフレーズを思わず思い出しました。どんなときにも覚醒剤等の薬物には決して手を出してはいけないのです。

定期考査の思い出

貫井中学校では、11月16日(火)、17日(水)、18日(木)の3日間で期末考査が実施されました。中学校で仕事をするようになり、40年近くの時を過ごしてきましたが、やはり中学校時代の考査にはいろいろな思い出があります。今でも恥ずかしい思い出として甦るのは、中学校1年生の時に友達と相談して、友人の家に泊まり込みで土曜日に勉強を徹夜でやってみようと思い実行したことです。



なぜ泊まり込み、徹夜なのか。今でもよく思い出せません。メンバーは4人。とにかく今でも覚えているのは、良く分からないことは互いに助け合って試験範囲の勉強を徹夜でいっぺんにやってしまおうとしたことです。そして、ある土曜日に計画を実行。

夕方6時ぐらいから試験勉強を友人の家で開始。自分たちの思惑どおりに夜11時ぐらい迄は勉強が進んだように覚えています。しかし、夜中2時ぐらいを過ぎると自然と眠気が勝り、4人ともテーブルの上に打つ伏して眠ってしまいました。気が付いたのは朝の6時。誰ともなく声を掛け合い、互いを起こしながら勉強を再開しましたが限界。すでに思考力はゼロとなっていました。

お互いに考えたことが如何に「浅い考え」で、「無謀」な事だったかを思い知らされました。そして、いっぺんに勉強しようとするのが、残念ながら無駄であること。そして、コツコツと努力することに勝るものはないということに気が付かされたのでした。



その後ある時、学年で一番成績の良い男子生徒に「オマエはいつもどうやって勉強しているの?」と単純に疑問をぶつけ、聞いたことがありました。その彼は「いつもそんなにやらないよ」「毎日、少しずつ」という言葉を使って我々仲の良いメンバーに説明してくれました。「ほーっ!」。「毎日、少しずつ」。「勉強もため込まないで毎日少しずつ進めれば良いんだ」と、少年時代の自分は妙に納得させられ、そして何となく上から目線で同学年の子から教えを請うた事に、少し悔しい思いをしたと、今でも覚えています。どんなことでもコツコツと努力することに勝るものはない。そう考えることが必要と、年を重ねてからも思うようになりました。